

〔古事記〕^上於御淚所成神、坐香山之畝尾カネヲ、コノモトニ木本、名泣澤女神、

〔日本書紀〕^{神代}至期果有大蚺頭尾各有八岐眼如赤酸醬赤酸醬此云、阿箇箇、知、松栢生於背上、而蔓延於八丘八谷之間、

〔古事記〕^上於是須佐之男命、以爲人有其河上而尋覓上往者、老夫與老女二人在而童女置中而泣、
略 問汝哭由者何、答白言、我之女者、自本在八稚女、是高志之八俣遠呂智、此三字、每年來喫、○中 彼目

如赤加賀智而身一有八頭八尾、亦其身生蘿及檜榭、其長度、タニヤ、タニヤ豁八谷峽八尾、而見其腹者、悉常血爛也、

〔古事記傳〕^九峽は袁と訓べきこと、豁八谷の例にて明し、尾に此字を書る例は、書紀懿德卷に曲
峽宮、神功卷に活田長峽國などあり、峽は、和名抄に、峽、山間、陝處也、俗云山乃加比とある、如く、無

斷處など云る、彼山の長く連なれ、尾には非ず、但し、荊州記に、三峽七百里中、兩岸連山、無
るさまを取て、尾に用ひたるにや、書紀には、蔓延於八丘八谷之間と書れたり、此餘も、尾には、畝
字は多くけり、

〔日本書紀〕^四懿德二年正月戊寅、遷都於輕地、是謂曲峽宮、

〔古事記〕^上爾八十神、謂其菟云、汝將爲者、浴此海鹽、當風吹而伏高山尾、^上
〔古事記〕^下恭、故其輕太子者、流於伊余湯也、略○中 故追到之時、待懷而歌曰、許母理久能、波都世能、夜麻

能、意富袁爾波、波多波理陀氏、佐袁袁爾波、波多波理陀氏、意富袁爾斯、那加佐陀賣流、淤母比豆麻、阿
波禮、略○下

〔古事記傳〕^{三十九}意富袁爾波は、契冲云、大峽者なり、山口祭、祝詞に、奥山乃大峽、小峽爾立留木乎
云々、日本紀に、峽を乎とよめりと云り、書紀に、峽を乎と訓るは、神功卷に、長峽などある、是なり、
八峯などもあり、如、此字はさまん、波多波理陀氏は、幡羅建加、佐袁々爾波は、眞小峽にはなり、
意富袁爾斯は、於大峽にて、斯は助辭なり、

〔古事記〕^下雄略一時天皇登幸葛城山之時、略○中 有其自所向之山尾、登山入、